

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第92号 2022年8月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム		
読書会という可能性 ―知の共同体をつくる―	金澤 冬樹	2
逸話と世評で綴る女子教育史(92) ―大正期にいたる熊本県の動向と私立高等女学校の開校―	神辺 靖光	6
受験生らへ向けた内藤二郎学長メッセージ ―大東文化大学『CROSSING』2023年から―	谷本 宗生	12
明治後期に興った女子の専門学校(47) ―明治期の近代体育教育事情―	長本 裕子	14
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 (17):鳥取県議会における専攻科関係の発言(3)	吉野 剛弘	19
史料紹介 『校友』(松本中学校文芸部)第89号より その4 中島益男「矯風会報告書」の補足	富岡 勝	24
体験的文献紹介(40) ―勃然と湧いた学位請求論文構想―	神辺 靖光	28
刊行要項(2015年6月15日現在)		33
短評・文献紹介		34
会員消息		35

コラム

読書会という可能性 — 知の共同体をつくる —

かなざわ ふゆき
金澤 冬樹

(長野県立大学・職員)

● 学生時代の「青い」読書会

近年、読書会が再注目されているらしい。コロナ時代の新しいコミュニティとしても模索され、多様な試みが盛んに行われているようだ⁽¹⁾。

私自身、読書会との付き合いは長い。学生時代、ゼミや授業で学術書を読み、レジュメを作成して皆で考察を深める正課授業はあったが、それとは別に、学生同士で自主的に指定図書を決めて、皆で議論し合うということをやっていた。分かったような気になって読んでいたが、どれだけ正確に内容を理解できていたかは怪しい。ただその読書会は、内容を正確に理解することだけが目的ではなかった。同じ本を読んで、意見として吐き出してみる実験場でもあったように思う。議論を通じて、友人が何を考えたのかを知るのはもちろん、自分自身が何を考えているのかを言語化できる空間だった。傍から見れば「青臭い」議論だろうが、議論が盛り上がれば自らの思索の回路や知識を総動員して、真剣に語り合った。若さゆえの銜いや背伸びもあって、友人が自分の知らない知識や斬新な意見を語ると、焦ったり悔しがったり、たびたび向学心を煽られた記憶がある。天気が良ければ大学の庭で議論したり、語りが尽きなれば学生街に繰り出して、夜遅くまで語り合ったのが懐かしい。

● 社会人だからこそその「知」への欲求

就職後は、当然学生時代のようにはいかない。読書に向ける時間はどうしても学生時代に及ばない悲しさがある。幸いなことに、仲良くなった職場の同僚と読書会をするようになった。交互に図書を推薦して、各自で読み、一堂に会して議論するという会である。平均して2~3か月

に1冊、年に4～5冊を読むので、量は多くない。ただ、指定図書には「古典であること」という制約を付けているので内容の難解な場合が多く、1冊を読み込むのは相応に骨が折れる。新型コロナ拡大によって対面実施が難しくなってからも、オンラインという形で続け、知らず知らずのうちに5年以上になる。

就職してから読書できる時間は少なくなったものの、読書への欲求はむしろ強くなったように思う。もちろん、実社会での様々な経験や出来事から大きく影響は受けるが、それら実社会の様相を相対的に考える「知」というものに、欲求というより渴望に近いものを持つようになった。そんな中であって、読書会は私にとって貴重な時間である。

●「古典」という土俵

同僚との読書会で読むのは、デカルトやルソー、マックス・ウェーバーやE・H・カー、福澤諭吉や和辻哲郎など、いわゆる「古典」と呼ばれる著作だ。洋の東西を問わず、哲学や政治、歴史や宗教など、分野を限定せず関心に応じて読んでいる。

学生ではない社会人が「古典」を一緒に読み、議論する読書会の活動には、どのような意味があるのだろうか。まず、そもそも「古典」を設定できるほど現代社会は価値観が単純ではなく、「古典」そのものをどう捉えるか、自明のものではないとされる⁽²⁾。だが、人間や社会の捉え方、価値の転換をもたらした著作は、長らく風雪に耐えてきたこともあり、やはり読み応えがある。批判的に読むにせよ、評価するにせよ、一緒に考え議論を戦わせる上で、十分な広さを持った土俵には違いない。

●対等で自由な対話空間

長く続けている読書会だが、自分自身にとってどんな意味があるのだろうか。課題図書が難解な「古典」なので、複数人で読めば内容も多

少分かるようになったりするのは利点だろう（やっぱり分からないという確認の場合も多いが）。挫折せずに何とか読み終えることができるのも、一緒に読む良さの一つかもしれない。ただ、より重要なのは、仲間と一緒に本を読み議論するという作業の持つ意味だ。読書会で重要だと思うのは、議論における対等性や、自由な意思表示の相互承認という前提が保証されていることだろう。

他者の意見を聞き、自己の意見と戦わせることで、自己の思考が可視化されるとともに、自己の考え方や意見が大きく変わることがある。議論ののちには、対立が残るのではなく、互いの考え方の違いや今後の課題が見えてくる前向きな何かが残る。自己の意見が変わったら負けである「討論」とは違って、自己の考えに何らかの変化がなければ意味のない「対話」がそこにはある。

対等で自由な対話。簡単そうに見えて、様々な関係性やしがらみの中で生活していく必要のある実社会では、なかなか見出しにくい空間ではないだろうか。

●読書会の可能性—知の共同体？

読書会での議論は、知への共同意識を生み、育てていく効果がある。対話を軸にした知の共同体というようなものをつくることに繋がるような気がする⁽³⁾。知の共同体は、大学という場にこそ求められるのかもしれないが、大学に限らず、普段の生活の中での実践で形作ることのできるのではないか。知の共同体がなかなか形作られにくい現実の中、些細な実践ではあるが、その可能性は少なくないと思っている。

読書会そのものは決して新しい活動ではなく、日本国内だけでも長い実践の歴史があるようだ⁽⁴⁾。だが、この混迷する時代において、読書会が持つ可能性は増しているように思う。読書会の可能性—。そんなことを考えつつ、今後も読書会で「青い」議論をしていきたい。

【注】

- (1) 読書会の実践例としては、例えば向井和美『読書会という幸福』岩波新書2022年など。
- (2) 現代における「古典」の捉え方の難しさは、藤本夕衣『古典を失った大学—近代性の危機と教養の行方』NTT出版2013年を参照。
- (3) 隠岐さや香「新たな知の共同体を作れるか」『中央公論』2021年8月号では、対話を軸とした知の共同体について論じている。
- (4) 前田勉『江戸の読書会—会読の思想史』平凡社選書2013年では、江戸期の藩校や私塾における会読から、明治初期における自由民権結社の読書活動まで射程に入れた分析を行っている。

***コラム欄では読者の方からの投稿もお待ちしております。**

逸話と世評で綴る女子教育史(92)

—大正期にいたる熊本県の動向と私立高等女学校の開校—

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

大正15(1926)年の熊本県における公立私立の高等女学校は17校、公立実科高等女学校8校、計25校で、九州一円では福岡県の26校に次いで女学校の盛んな県である。近畿の兵庫県に続いて熊本県の女学校を述べたいが、まず九州における熊本県の立ち位置を素描(ソビョウ)しよう。

熊本県は九州の中央部に位置し、北に福岡県、東北に大分県、東は宮崎県、南は鹿児島県に接し、西は有明海を隔てて佐賀・長崎県と相對している。その地形をみると東の県境は九州山脈の峰々が連なり、続いて阿蘇外輪山の高原台地、さらに低い高原と沿岸平野が広がって有明海に至る。したがって熊本県の河川はすべて九州山脈、阿蘇外輪山を水源として西に流れて有明海に注ぐ。熊本の人々は古来農業で潤った。

熊本県は古代律令制で言えば西海道の肥後の国である。武家の世になり豪族が各地をとり合ったが1587(天正15)年、豊臣秀吉によって佐々成政が肥後一国の国守に任命された。しかしやがて破滅させられ、1600(慶長5)年には肥後52万石を加藤清正が領することになる。清正死後、細川忠利が肥後54万石の領主となって以後、明治維新まで細川家が大名として君臨した。天保の大凶作の時、熊本藩は被害が少なく、ために大阪での肥後米は高騰したので熊本藩の上層武士たちは大いに潤い、一般庶民と下級武士が困窮した。この時、藩校・時習館出身の一介の学徒・横井小楠が藩政改革を叫んだので多くの藩士から支持された。これを実学党と呼ぶ。ところが同時にこれに反対する学校党が現われ、この二派閥が対立しながら明治維新にもつれ込むのである。

明治維新の動乱は薩摩、肥前の武士が先頭に立ったが、維新直後の最大の内乱も薩摩で起り、その決戦は熊本城で行われた。肥後人は一心同体にならない

お国柄だから官軍と西郷軍にそれぞれ分かれて戦った。熊本城の官軍は善戦し、西郷は故山で自害して、この危機的内乱が終了した。西郷軍の猛攻撃に耐え抜いた熊本鎮台兵勇敢の名は高まり、明治18年には熊本城に歩兵2箇連隊の陸軍第11旅団が編制されて九州一円の陸軍の本拠になった。さらに21年、熊本鎮台は陸軍第6師団になり、師団司令部の外にその周辺に歩兵、騎兵、砲兵等の連隊が置かれて熊本城は九州一円の陸軍根拠地こんきよになった。日清戦争では第二軍の主力となり、多くの戦死者を出しながらも戦果をあげて凱旋がいせんした。次いで日露戦争がはじまると熊本第六師団は6万余の将兵を大陸に送り遼陽会戦、奉天会戦で戦い6000余りのロシア兵俘虏ふりよを引き連れて凱旋した。熊本県は九州を代表する陸軍県になったのである。

近世熊本藩校時習館で培われた学問好きの伝統は消失したわけではない。維新のはじめ熊本藩の実権は一時、実学党が握ったが、明治2年総帥の横井小楠が暗殺されると熊本政治の実権は学校党に移り、やがて政府派遣の県令に移る。そして実学党の面々は中央政府で活動したり、あるいはグループの趣旨や名称を替えて活躍するのである。思想・教育の面でみると小楠が暗殺される以前から藩校に替る洋学校が提案されていたが、彼の死後、米国退役士官ジェンズを招いて熊本洋学校えびなだんじょうができた。ここから海老名弾正、浮田和民、徳富蘇峰かづたみら新しい指導者が排出した。このグループを熊本バンド(隊)という。

政治家との縁えんによって政府の高官になり、近代日本の発展に貢献した者も多い。山縣有朋の推挙で頭角をあらわし司法大臣から大正13年に総理大臣になった清浦奎吾きようらけいごを筆頭に中央政界で活躍した熊本県士族も多い。藩校時習館で学んだ井上毅は長崎でフランス語を学び上京して司法省に出仕しフランスに留学、帰国後、伊藤博文の下で憲法起草に尽力した。また、法制局長官として教育勅語の起草にも当り、また明治26年には第2次伊藤内閣の文部大臣として中等教育、実業教育の起草に成果をあげた。本シリーズの初期に述べた明治天皇の侍講、教育勅語成立の中心的人物、元田永孚も熊本藩校時習館の出身、維新

の頃は実学党に傾倒していた。上京して大久保利通の推挙で明治天皇の侍講になり教育勅語の成立に深くかかわった。

大政奉還・廃藩置県からはじまった明治維新の改革で国民は一枚一枚、皮を剥ぐように徳川封建体制の桎梏から解放されるが、この国家体制の大改革に実施者たちは範をヨーロッパの近代帝国にとった。立法、司法、行政、軍事、警察、学校等、形式と外形はすべて欧米風で、国民に姿を見せる時はヨーロッパ風貴族の正装で髭（口ひげ）鬚（あごひげ）までたくわえた。徳川封建社会の風俗を徹底的に排除したのである。そして万世一系という架空の話をつくり、中国皇帝の箴言（いましめの言葉）を真似た教育勅語とプロシヤ式君権主義（欽定憲法）の大日本帝国憲法制定によって明治の時代はそれ以前と全く違った社会、時代となったのである。民主主義国家に生存する現代の日本人からみればわかりにくいだろうが、いたずらに大名家の権威に跪き、理不尽な仕来りに喘いだ下級武士や百姓にとって内閣や帝国議会を擁する天皇制国家はどんなに解放感があったろう。帝国議会や内閣を通じて人民の声は政治のトップに伝わるという希望があったからである。

中学校の発祥を述べれば現県立済々黌高校に繋がる済々黌がある。創立者は藩校時習館の出身で熊本政界の雄・佐々友房である。西南の役には熊本隊を組織して官軍と戦ったので罰せられて入獄したが、出獄後、同心学舎なる私塾で青少年を教育した。これを明治15年、大々的な私立学校にしたのが済々黌である。皇漢学や数学・法律などを学ばせるほか撃剣を必修とした。彼を支持する熊本県人は多く、宮内省より特旨で500円が下賜されたり、旧藩主・細川家から寄附があった。経営が順



佐々友房

調に進んだので熊本市内の法律学校や医学校を合わせて九州学院と改称したが、明治26年、もとの済々黌を九州学院から分離独立させ、県費を受けて熊本県尋常中学済々黌としたのである。明治20年にはすでに熊本に帝国大学の進学資格を持つ第五高等中学校が創立されて熊本は九州の学校の中心県になっていった。

熊本県で最初にできた女学校は熊本市の私立尚綱女学校である。その発端は明治21年開校の済々黌附属女学校である。済々黌校長・佐々友房の妻静子が数人の少女に編物や洋裁を教えたのがはじまりで、佐々や済々黌の教頭格の内藤儀十郎の肝煎で開校、内藤が初代校長になった。開校当初は教員13名に対し生徒23名であったが教え方がよいという評判がたち、その年の終りには103名に増加した。教え方というのは従来の個別裁縫教授を排して裁縫教授用掛図を用



内藤儀十郎

いて一斉教授をしたことである。これが熊本市民にうけて、この女学校の生徒は年々増加した。24年、済々黌の附属を離れて独立した尚綱女学校となり、29年、校名を私立尚綱高等女学校と改称、32年には高等女学校令に適格された。この年には生徒数350人を超え、熊本県随一の女学校になった。“尚綱”は中国の古典・詩経の「錦を衣て綱を尚う」に由来する。綱は麻か木綿の“うちかけ”のことで、どんなに華やかな上等な衣装を着ても、その上に“うすぎぬ”をはおって慎めという上品さを教えたものである。内藤儀十郎の教えと想う。内藤は大正8年、その生涯を閉じるが、明治44年、尚綱高等女学校を財団法人化し、自ら退いて45年、熊本中学校教頭の福島綱雄が第二代の校長になった。福島は内藤が創った尚綱の伝統を活しながら同窓会や県に働きかけて学校の拡張をはかり、大正7年には熊本県が3ヶ年継続5万円の補助金を可決して新校地に新校舎を

たてた。私立でありながら県の絶大な援助のもと尚綱高女は熊本県外、特に宮崎県、鹿児島県、長崎県からの入学者が多く“良家に嫁に行くなら尚綱”という風潮をつくったと言われる。私立尚綱中学校高等学校(女子校)として現代に続いている。

明治22年、熊本市に私立熊本女学校が開校、創立者は竹崎順子である。順子は1825(文政8)年、肥後上益城郡の郷士矢島家の娘として生まれた。妹は本シリーズにしばしば登場した女子学院院長で矯風会会頭の矢嶋かじこ楯子であり、徳富蘇峰・蘆花の兄弟はその甥である。順子16歳の時、横井小楠の高弟・竹崎茶道と結婚した。茶道は私塾日新館をつくり、多くの子どもを教育したが、順子もまた夫を助けて少年青年たちに慕われた。明治10年、夫の茶堂が没した。以後10年、順子は夫



竹崎順子

の教育精神を慕い続け、明治20年、順子63歳の時に友人数人と熊本女学校を発足させた。これを発展させて21年、熊本市内に新校舎を建て私立熊本英学校附属女学校としたのである。熊本英学校は男子の学校で福岡、宮崎、鹿児島県から来学者があり英学と漢学を教えたが附属女学校は和漢学と女の手技を教えたのであろう。熊本英学校は29年、何らかの理由で廃校になった。女学校にも圧迫があったらしいが順子の必死の願いで存続し22年、熊本市に新校舎をたて私立熊本女学校として認可された。校長は海老名弾正で竹崎順子は舎監である。明治30年に順子は校長になったが彼女はよわい年齢73歳。以後、全身全霊を込めて教育に当たったが、38年81歳の生涯を閉じた。大正10年、私立大江高等女学校と改称、戦後は大江高等学校となり、のちフェイス女学院高等学校などに改称し、2011年まで続いた。

参考文献

森田誠一『熊本県の歴史』（山川出版 県史シリーズ43）

松本寿一郎『熊本県の歴史』（山川出版県史43）

熊本県教育会編『熊本県教育史・中巻』同右『下巻』、長坂金雄『全国学校沿革史』

日本私立中学校高等学校連合会『私学の創立者とその学風』

櫻井役『女子教育史』

受験生らへ向けた内藤二郎学長メッセージ
— 大東文化大学『CROSSING』2023年から —
たにもと むねお
谷本 宗生 (大東文化大学)

最新の大東文化大学『CROSSING』2023年用から、受験生らへ向けた、大東文化大学の内藤二郎学長メッセージを紹介したいと思う。学長メッセージのタイトルは、「さまざまな『文化』に触れ、学び、体験を重ね 多文化共生社会に必要な『寛容な心』を育ててほしい」という。

「大東文化大学を目指す皆さんには、この大学でたくさんの挑戦をしてほしいと考えています。まだ目標を定めていない方はもとより、将来のビジョンを持って進学される方も、時には自分の興味から外れた未知の分野を体験することが新たな学びにつながるかもしれません。可能性を自ら狭めず、多くを学び体験することで、広い視野と寛容な心を身につけてください。迷ったときや困ったとき、心強い教授陣が支えになってくれるでしょう。学生に熱意を持って向き合う多彩な教授陣はわが校の自慢の一つです。さらに大学では皆さんの成長のため、たくさんの人や地域・企業との出会いと学びの場を提供し、自分らしい将来を描くことができるようサポートします。

大学が創立100周年を迎える2023年度は、本学の歴史と伝統に触れる機会も多くなるでしょう。大学もさらなる成長を目指し、新たな挑戦を続けます。18~22歳までの学生だけでなく、留学生、社会人、地域住民の方など、多様な立場の方が集い学べる開かれた大学づくりをはじめ、多様性やSDGsへの取り組みなども強化してまいります。また今年度からは、万全の感染対策のもと原則的に全授業を対面授業として実施。コロナ禍の経験を踏まえ、オンラインやオンデマンド配信などを効果的に組み合わせたハイブリッド型の新しい学びの体制づくりにも取り組みます。

皆さんは本学での学びを謳歌し、伝統のある大東文化大学の一員として頼もしい人間に成長してください。多くの人が輝ける多文化共生社会の実現を目指して、ともに成長していきましょう。

*** **

内藤学長の、コロナ禍においても最大限に学生諸氏の可能性を応援していただくとする熱い思いをしっかりと感じる事ができるであろう。

コロナ禍・第7波といわれる状況にあっても、内藤学長は全学教員に向けて、「前期試験を欠席した学生の追試験等について」（2022年7月）を発している。その趣旨は、授業中試験や定期試験期間中の試験を、コロナ禍にともない欠席せざるを得ない学生が出た場合、相応の事情等を踏まえ、試験欠席の申し出があった学生に対し、追試験や試験の代替課題によって、当該学生の不利益にならないよう十分なる配慮を願いたいのだという。在学生らも、これをうけてきつと心強いはずであろう。

明治後期に興った女子の専門学校(47)

明治期の近代体育教育事情

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

近代体育の本格的な出発は、明治11年10月に設けられた文部省直轄の体操伝習所に始まる。文部省は、明治5年に発布した「学制」以来、知的偏重によって生じた身体的欠陥を防ぐため、海外より体操に通じた学士を招く計画を立て、欧米視察の経験がある文部大輔田中不二麿に担当させた。田中は、11年9月、米国アマースト大学出身で、ハーバード大学で医学を修めた医学士ジョージ・アダムス・リーランドを招聘した。リーランドはアマースト大学在学中に体操クラスのキャプテンを務めるなど、体育運動に優れていた。

文部省は11年9月6日付で体操取調掛を設け、伊沢修二を主幹に任命した。伊沢は急ぎ「新設体操着手方按」をまとめた。『茗溪体育八十年』によってその目的の一部を概略しよう。

…維新以来、日本古来の武芸は全く地に落ち、若者は知育に偏り、脳力は国論を動かすに十分でも、体力は百斤を挙げるには足りない。…官費生を募り、アマースト大学の現行の体操術を斟酌して、我が国の生徒に適する方法を見出し、諸学校に施行すべきである。これらの官費生は将来体操の師範となることを本旨とする。

若者の体力向上のために体操の指導者養成が必要なことを述べ、伝習所開設の必要性和運営方法を具体的に示した。11年10月、神田一ツ橋に体操伝習所が開設され、伊沢と通訳官坪井玄道が協力した。

リーランドは、日本の学校を視察した結果、器械を使うドイツ式の重体操より、米国の医学士ダイオ・ルイスの「新体操」から引用した徒手体操、木垂鈴、球竿、木環、棍棒などの軽手具を用いる軽体操が適するとした。学生生徒の健康保持を目的とした体操である。後に「普通体操」と改称され、明治30年代前半まで学校体操の主流となる。

体操伝習所は、18年12月、東京師範学校附属体操伝習所となり、19年4月、高等師範学校体操専修科に引き継がれ、廃止された。開設期間中に総数235名の卒業生を出し、19年にはほとんどの府県に体操教員が配置された。

リーランド帰米後、通訳官であった坪井玄道が伝習所の中心教員となった。玄道は、嘉永5（1852）年1月、現在の千葉県で誕生した。慶應2（1866）年、幕府の開成所に入学し英語を学んだ。明治7年、東京師範学校の教員となり、11年、体操伝習所が開設されると、リーランドの通訳を命じられた。リーランドの理論や技術の紹介、体操用語の翻訳を行っているうちに、体操に熱心になり、自ら体操教師となった。14年、リーランド帰米後、リーランドの軽体操を指導し、戸外遊戯を合わせた体育論を構築した。伝習所廃止後は、高等師範学校で体操を担当。この坪井に影響を受けたのが東京女子体操音楽学校の指導者高橋忠次郎であった。



坪井玄道（『写真でつづるお茶の水体育110年』より）

15年6月、体操伝習所からリーランドの講義と教授内容が『新撰体操書』と『新制体操法』として刊行された。整頓法、身体矯正術、徒手体操、垂鈴体操、女子垂鈴体操、棍棒体操、二人球竿体操で構成されていた。リーランドの軽体操は、軽手具を用いて手足や胴体を動かし、姿勢を美しくするのがねらいであった。

16年改正の徴兵令は、官公立の中学校・師範学校卒業者に対し、在学中に歩兵操練科を履修することを条件に在営期間の減免を認めた。そのため、17年ごろから各県の師範学校や中学校で歩兵操練科が実施され、小学校高学年においては隊列運動が課された。18年、森有礼が初代文部大臣に就任し、富国強兵政策を教育面から推進した。19年、「学校令」の公布により、学校体育は正課

の「体操科」として確立された。国家主義的傾向が次第に強くなり、男子には普通体操と兵式体操を並行した学校体育が形成されていく。

しかし、実際には実学や知育が重んじられ、依然として体育軽視の思想が強かった。20年、高等師範学校体操専修科が休止された。体育指導体制の後退を危惧した陸軍退役下士官の日高藤吉郎が、24年8月、東京市牛込区に、体育の啓蒙普及を目的として「日本体育会」を設立した。26年には体操教員養成の場として飯田町に日本体育会附属体操練習所を設置した。これが現在の日本体育大学の前身である。32年に高等師範学校体操専修科が再開されるまで、講演会や幻燈会の開催、体育雑誌『文武叢誌』の発行など体育啓蒙活動を行い、体育指導を牽引していく。

後に東京女子体操音楽学校の運営を托される藤村トヨが、小学校の教師になった明治20年代後半の普通体操や遊戯の様子をトヨの寄稿（『体操』第二卷第三号）から見てみよう。

私が初めて小学校の教師になった時は、「一二三、二二三」或は「一二三四、五六七八」等の呼唱や、又軍歌や行進曲に合わせて連続体操を行った。…体操としては女の子には、民草、猿蟹、桃太郎、かちかち山等、日清戦争後は男の子には、勇壮な軍歌に合わせて、例えば忠魂義胆、日の丸の旗、四百余州等勇壮な表情体操が行われた。又オルガンの音律に合わせて亜鈴、球竿等は実に円滑なる連続体操として一般に用いられた。…男子は軍隊体操と連絡を取って進んで居ったが、女子は唯、徒手体操や亜鈴、球竿、木環等の軽器械を用いた。体操の前に競争遊戯とともに行進遊戯（ダンス）を課せられて、男子とは余程其趣を異にして居った。（『藤村学園七十年の歩み』）

男子には日清戦争後は軍歌やオルガンに合わせて普通体操と軍隊体操が行われる様子、女子には徒手体操や軽器具を用いての遊戯が行われていた様子がうかがえる。

女子の体育は、32年9月、井口阿^{いのくち}くりが女子体育研究のため、文部省からアメリカ留学を命じられて渡米し、ようやく関心を持たれるようになる。32年、女子

高等師範学校校長に就任した高嶺秀夫は、将来丈夫な日本人を産み育てるためには女子の体を健康にしなければならない、そのためにも女子の体育は重要と考え、女子体育を教授できる人材を探していた。そして、山口県の私立毛利高等女学校で教頭・舎監を務めていた井口に白羽の矢を立てた。

34年の「高等女学校令施行規則」第13条に、

体操ハ身体ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ之ヲ穩健ナラシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ容儀ヲ整ヘ精神ヲ快活ニ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尚フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

とある。女子の体操は身体を均齊に發育させて礼容を整えることや、精神を快活にし、規律の順守、協同を尊ぶ習慣を養うことを目的とした。

36年3月の「高等女学校教授要目」では、さらに具体的に示された。週3時間の体操科は、普通体操（準備、整容、呼吸、矯正、徒手、垂鈴）と遊戯（行進運動及び遊戯）が2対1の比で課せられることになった。教授上の注意として、“なるべく女教員に教授させること。過度の運動や女子の月経期及び不衛生な環境の下における運動を制限すること。衣服殊に帯袴の仕立方や着方に留意し、四肢の運動や呼吸及血液循環が自在にできるように配慮すべき”とされた。

体育の發達が富国强兵の基礎である。男子の体育は奨励されているが、女子の体育は置き去りにされている。女子教員が渴望されている。こういう時勢をとらえて、35年5月、我が国最初の女子体操教員養成機関として、山崎周信や高橋忠次郎によって東京女子体操学校が開設された。36年2月、井口が3年半の留学を終えてアメリカから帰国した。それに合わせて女子高等師範学校に国語体操専修科が新設され、井口が教授となり、女子体操教員の養成が始まった。さらに同年4月、日本体育会附属体操練習所が女子体操指導者養成を目的に、女子部普通科を、翌37年女子部高等科を設置した。こうして、ようやく女子の体育教育が緒に就いた。しかし、女子高等師範学校でさえ、体操専修科とせずに「国語体操専修科」としたのは、

体操科を主とすれども、一は学習者の修養上の為に、又は当時に在りては体操一科のみの女教師に在りては採用の際不便なるべきを察して国語科を併せ課したるなり(『藤村学園100年のあゆみ』)

と高嶺校長が述べているように、体操だけの学習では修養上欠けるところができることと、体操の免状だけでは就職に不利だからである。当時はまだ体操の地位が低かったことがわかる。体操のみの女子教員養成は難しかった。日本体育会女子部も長く低迷が続く。

参考文献

『学制百年史』文部省

『藤村学園100年のあゆみ』

『茗溪体育八十年』

『学校法人日本体育会 日本体育大学 八十年史』

『日本近代教育史事典』平凡社

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書(17):鳥取 県議会における専攻科関係の発言(3)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、前号に引き続き、鳥取県議会における専攻科に関する質問と答弁を検討する。今号からは、専攻科が廃止に向かう過程を議会での発言を通して追っていく。

以下、実際の質問と答弁を見ていくことにする。なお、質問も答弁も専攻科以外の点についても言及していることがほとんどであるので、専攻科に関する部分のみを摘記したものである(冒頭に専攻科についての発言がある場合は、最初から記載している)。

2000(平成12)年7月5日 平成12年6月定例会(第3号) 本文
1番(湯原俊二君) 次に、先ほどの公社・事業団のあり方で問題になる官と民のすみ分けと同種の問題を抱えている県立高校の普通科、専攻科の問題であります。

現在、全国で普通科の専攻科があるのは我が鳥取県だけであります。我が県の3校であります。昨年の2月定例県議会においての専攻科の廃止の陳情の趣旨採択を受けて、今年度より専攻科の定員が各校とも100名から80名になりました。この問題は、先ほどと同様、官の民への圧迫、民間の予備校や私立の専攻科が廃校に追い込まれてきた状況と、一方で、少子化の要因の一つに高等教育への保護者の負担の増大があります。県内の普通科、専攻科の存続を求める声、ニーズにそのことがつながっていると考えます。

民間がない鳥取県内における中部地域、倉吉東高等学校の専攻科はともかくとしましても、私の考えは、やはり勇気を持ってこの問題も民間に任せて

いくべき。そして保護者の負担に対しては、さきの 2 月定例県議会でも問題になった奨学金制度の予備校生徒への対象の拡大をもって対応すべきと考えます。教育長の答弁を求めます。

教育長(有田博充君) お答えします。

最初に、県立高校の専攻科の廃止に関することをございました。

お話のように、現在、県立高校 3 校に専攻科を設置しておりますけれども、上級学校への進学に対する長年の実績でありますとか、あるいは経済的な問題、そういったことから非常に根強いニーズがございます。しかし、11 年 2 月、これもお話にございましたように、本県議会で廃止の陳情に対しまして趣旨採択がなされました。それを受けまして、それぞれ 100 名ずつの募集定員を 20 名ずつ減らして当面存続させております。

この趣旨採択を受けまして、今年、平成 12 年の 6 月に、改めて県立高校普通科の生徒や保護者に対するアンケート調査を実施しました。その結果、高校卒業後、浪人する場合に、いわゆる県立の高校、専攻科で学びたいと考えている生徒が 6 割、保護者の方が 7 割という結果が出ております。その理由は、先ほど申しましたように、経費が安いこと、進学実績がよいこと、さらにはきめ細かな指導がなされることなどでございます。

今後、お話のありましたように、私立学校のいわゆる民間の方々の方々の動向、御意向、これも重視しなければなりませんし、あわせてこのような高校生や保護者の方々がどういうお気持ちを持ち続けになるのかということも十分に見きわめなければならないと考えております。とりわけ全国的に 18 歳人口がどんどんと減少していきますれば、今までのような大学入試のあり方も今後大きく姿を変えていくであろう。そのときに、いわゆる専攻科というものが従来のような形で、県立もあるいは民間も含めてどのように推移していくべきであるの

か、こういったことも十分に見きわめながら今後の検討を行っていきたいと考えております。

1 番(湯原俊二君) 教育長に、専攻科のことでありますけれども、御答弁がありました。長年の実績もあるし、経費が安いということもあるし、それなりにアンケートしたら生徒で 6 割、保護者で 7 割の方が県立の普通科、専攻科を認めていらっしゃる、行きたいということでありました。今後は 18 歳人口の推移を見ながらということではありますが、ただ私は、先ほどの公社・事業団と相通ずるものがあると思うのです。それは、税金を使って県が、公がやれば安くできるし、経費的にも安くなるのはもちろんであります。もちろん保護者の皆さんも生徒の皆さんも、そういう意味では安くて身近なところにあるのが一番です。それはもっともなんです、ただ逆な形で、その考えはわかるけれども、県の教育委員会あるいは県行政としてどうあるべきかという考えを持たなければならないと思います。そうしないと、迎合とは言いませんけれども、何でもかんでも公がやった方がいいというようなことになってしまいますので、これは再度の御答弁は必要ないですけれども、意見だけは言っておきます。両論があろうかと思しますので、御認識はいただきたいと思います。

教育長(有田博充君) お答えします。

最初に、専攻科の問題、御要望ということでございましたが、一言触れさせていただきます。

端的に言うと、鶏と卵論に近い部分があるかもしれません。現実に私立の学校でどんどんと実績を上げていただく、このことも非常に大事なことだと思うわけです。専攻科をなくすれば自動的に上がるということになりましても時間がかかる。当面は、先ほど言いましたように十分推移を見ながら、そして子供たちの思いといいますか、そういったものを十分に把握しながら、結果とし

ては、順次数は減らしていく方向をとるのが一番よい方策かなと思っております。一度に県立学校の専攻科を廃止しましたら、困るのは子供たちであります。そういう影響を最小限に食いとめながら、民間の方々の力がどんどんと大きくなっていく、そのために望ましい方策を引き続き考えたいと思っておりません。

湯原は、1995(平成 5)年から 2009(平成 21)年まで議員を務め、米子市選挙区から選出された。所属会派は信である。自民党の衆議院議員の相沢英之の秘書をしていたことがあるのだが、県議会議員の後は民主党の衆議院議員を務め、その後いくつかの政党を移り、現在は立憲民主党の衆議院議員である。

湯原は、官と民のすみ分けが必要という論理に基づいて、専攻科のあり方の変更を求めている。一方の県当局は、生徒のニーズがあるという事実に基づき、変更には慎重な姿勢を取っているが、「順次数は減らしていく方向をとるのが一番よい方策」と発言しており、民間への移行を表明するにいたっている。

前号でも触れたが、この質疑応答の前には県の私立学校協会から専攻科の縮小の陳情が採択されており、基本的には専攻科の維持というのは厳しい情勢にある。湯原は県の姿勢を生徒や保護者に迎合していると指摘するが、専攻科の廃止や縮小を訴える側も私立学校協会に迎合している側面がないとは言い切れない。事実、後の機会に触れるが、専攻科の縮小が民間には喜ばしいという趣旨の発言も、後の議会では議員よりなされる。つまり、専攻科の縮小は明らかに利害の絡む議論であるということである。

一方の県当局も生徒のアンケート等を引き合いに出して、専攻科の維持

のために動いている。これまた後の議会で明らかになることなのだが、民間を今一つ信用していないようにも思われるのである。

一方で、専攻科の縮小を求める湯原にあっても、中部の倉吉は例外という見方をしている。この点は専攻科の廃止過程にも関わってくる上に、中部は例外という構図は後にも何度も登場する。この点は後に検討することにした。

(付記) 本研究は科学研究費補助金(20K02435)の助成を受けたものである。

史料紹介

『校友』(松本中学校文芸部)第89号より その4

中島益男「矯風会報告書」の補足

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

前号で、『校友』(松本中学校文芸部)第89号に掲載された中島益男「矯風会報告書」を紹介した。1946年5月から同年12月に戦後2代目の矯風会長をつとめた中島によって書かれた矯風会の活動報告であり、以下の5点に要約できることを述べた。

① 戦時中の学校報国団の校風部では修養会などで暴力が見られたことについて、中島は「個性を踏みにじり自由を圧迫して来た」行為であったと批判していた。

② 中島は、「松中生が自由に自己を延ばし得る、そうして我等の学校をして秩序ある美しい天地にせしむる」ような、自由と秩序が調和した矯風会を目指していた。

③ 1946年7月の矯風会総会で、矯風会の存廃問題が持ち上がると、存廃は保留のまま、従来の「風紀取締ニ関スル決議事項」はすべて撤廃された。存廃問題は1946年12月に存続と決定した。

④ 衛生系の活動として、荒廃していた校舎と校庭の整備清掃が係長の生徒を中心に熱心に取り組まれた。

⑤ 1946年10月から矯風会役員が「担当」として各クラスについて下級生を指導した。

実は中島は『校友』で発表した「矯風会報告書」だけでなく、自らの手記に矯風会長としての思いや経験を書き留めており、『松本中学松本深志高等学校九

十年史』(1969年)には、中島の『手記』をもとに、1946年当時の矯風会について、さらに詳しい状況が記述されていた。本号では、前号の記事の補足として、中島の『手記』に依拠した『九十年史』の記述を紹介して、1946年当時の矯風会の状況についてもう少し述べておきたい。

矯風会存廃論議の状況

『九十年史』には、矯風会存廃論議が起きた1946年6月・7月の状況が、次のように記されている。

1946年6月21日、矯風会第1回役員会の会則審議で、全校友を強制的に会員とするか否かでもめた。この問題は7月4日の第1回矯風会総会で、むしかえされ、「矯風会ハ必要カ否カノ問題ニ発展シ、満場騒然、議論百出」(『手記』)の状態が6時間にわたって続いたという。議論の主要な論点は、「問題ハ矯風会ヲ廃スルカ存続サセルカデアル。廃ストイフ側ノ主張ハ、個人ノ自覚ニアリ、不必要ノ束縛デアルトイフ。又存続スル側デハ、団体秩序ノ保持デアリ、個人ノ不完全ニアル。」(『手記』)といったものであった。

この矯風会存廃問題は、教員の口添えもあって、一気に採決に至らず棚上げされたが、そのことに憤激した生徒たちの突き上げで、7月8日と15日の総会で、映画興業物や食堂喫茶店への立ち寄りについての従来の取り締まりが撤廃された。

矯風会の活動に生徒たちが意欲を示さないことで悩んだ中島会長は8月21日に校長に辞意を申し出るが、校長はそれを認めず、「更ニ考ヘテミヨ」と言った。その後、中島は「飯を食っている間も、床を延べる間も」「矯風会はあってもよいか」と煩悶するが、学校も相談会役員も、矯風会役員の多くも冷淡であったという。

つまり、矯風会の存廃は保留のまま、矯風会をどのようなものにするのが深まらないままで従来の矯風会の活動の柱の一つであった映画興業物等や食堂喫茶店に関する取締りだけが撤廃される状況であったことがうかがわれる。

中島の「矯風会報告書」では、7月の矯風会総会について次のように書かれていた。

松中生が自由に自己を延ばし得る、そうして我等の学校をして秩序ある美しい天地にせしむるものでなければならない。この内に湧き起つた松中生の意向は七月の総会にその儘現れた。同席上に於ては、前年まで行はれて来た規約事項は一切撤廃され、映画、演劇等の興業物の開放、興業的、拾得物風紀系の廃止等が決議された上、過去にその例を見ない会の本質についての批判が加へられ会そのもの存廃が論議された。

これは『九十年史』に描かれた状況に比べるとかなりトーンが異なる。「矯風会報告書」では、矯風会のあるべき理念に向かって順序だてて議論が深められていったような印象を受けるが、『九十年史』の記述では議論が平行線のまゝ一時棚上げとなったときに、矯風会の方向性が見えないまま、規制だけが撤廃されたという混沌とした状況として描かれている。

校舎・校庭清掃活動の様子

「矯風会報告書」では、矯風会の衛生係が1946年秋に取り組んだ校舎・校庭の清掃活動を大きな成果として次のように述べている。

衛生係は特に年度の後半にわたつて工場動員医専共学等の為に荒れ果てた校舎校庭の整備清掃の為に係長石曾根君をはじめとして係員は、全校生が帰つてから遅く迄も残つて掃除の監督に、用具の整備に払つた苦勞は並々ならぬものがあつた。又十月以降であつたが、役員担当を各クラスにつけて、下級生の指導に尽力してもらつた。

しかし、『九十年史』が描いたのは、次のような状況であつた。

この年の矯風会がおこなったのは、実質的には清掃だけであった。7月18日に相談会での決議にもとづいて矯風会として校庭の掃除をしたところ、「作業態度ハ、特ニ四年五年ノ上級生不可。一般ニ勤勞意欲ノ極メテ低下シテキル所が見ラレル」(『手記』)であったと中島は記録し、「コレハ戦時中ノ勉強ヲ投ゲウツテノ終日ノ作業ノ反動トシテ、シカモノノ強制力ノ無クナツタ現在ノ学生ノ現レデアラウ。」と考察している。

9月15日には矯風会の存続保留のまま、校内美化の活動についてのみ実施することとなり、矯風会役員数名は放課後に清掃活動に熱心に取り組むが、10月20日には、「又学校では掃除の為^し振りが悪くなって来て、校舎の中も庭も垣根も汚ぐれ荒れ果てて来る」(『手記』)。状況になった。10月31日、翌日に「記念祭」が迫っているなかで、中島会長は「独断により」、各級を担当する役員を決定した。

第91号で紹介したように、『校友』第89号巻頭記事の「松中の再建」で小西謙校長は、戦後の新しい時代にふさわしいかたちで松本中学を再建するためには「松中自治」の再建が不可欠であると述べていた。

中島矯風会長が目指していた、「松中生が自由に自己を延ばし得る、そうして我等の学校をして秩序ある美しい天地にせしむる」ような、自由と秩序が調和した矯風会の再建は、戦後の「松中自治」再建の課題の一つであったと思われるが、中島会長の手記にもとづく『九十年史』の記述と「矯風会報告書」を併せ読むと、1946年の松本中学の生徒自治は、小西校長の期待や中島会長のいきごみの一方で、自由と秩序の調和という点では混沌とした状況であったと思われる。

体験的文献紹介(40)

— ぼつぜん 勃然と湧いた学位請求論文構想 —

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

話が前後するが、東京文化短大の大浜英子理事長が辞任し、私も副学長問題から解放された昭和50年秋の頃である。当時、私は日曜日でも研究室を兼ねた短大の教務部長室で研究や執筆をしていた。休日の教務部長室は静かで思索するに都合がよかった。その日も壁面一ぱいになった教育史資料や参考書を眺めていたら、学位請求論文を書こうという想いが勃然と湧いてきたのである。例えば師の尾形先生からの東京文化高校教諭就任の推薦状を手にして、この門を叩いてから20年たっている。大学院の2期あと3期あとの2人は日本教育史の学位請求論文を書いて文学博士の称号を得、教育学部教授になっている。しかるに今の私は据わり悪い短期大学教授で学生募集やら教務的事務等、経営上の下働きばかりやっている。念願の研究者生活に浸りたい。一たんそう想ったら止まらない。今がチャンスだとばかり、数日、学位論文の計画ばかり夢みて過ごした。

学位請求の中核は学制期の東京府における私立中学校、私立外国語学校の実態研究である。すでにその研究は「明治初年における東京の私立学校」(1)(2)(3)として3部の論文にまとめ、日本私学研究所の『教育制度等の研究』No.3、No.4、No.5に記載されている。よし、この学制期における東京府の私立中学校と私立外国語学校を調査検討し直して学位論文にしようと決意した。

明治8年1月、文部省は全国の府県に「公私学校表」の提出を求めた。最初は小学校、師範学校、中学校、外国語学校等であったがやがて専門学校その他の学校へ広がる。府県はこれに応じて管内の私塾や講習所、学校等を文部省が示す諸学校に分類し、文部省が送付してきた「公私学校表」の表式に従って登記した。表式は学校名称、所在地、公立私立の別、設置年、教員数、生徒数、校長名等である。明治初年は教育上の専門用語(例えば校長とか教科書等もなく、

各地の名称も府県統廃合の最中で混乱を極めたが、府県の担当者はそれらにめげず、「公私学校表」を文部省に送り続けた。文部省はこれを毎年刊行の『文部省年報』の中に「〇〇学校一覧表」（この表題もしばしば変る）を、外国語学校は明治7年の『第2年報』から、中学校は明治8年の『第3年報』から掲載し続けた。

明治8年の『文部省第3年報』収載の東京府の「私立中学校表」は83校である。全国の私立中学校は105校であるから、実に8割が東京府に集中していたことになる。校主たちの顔ぶれをみると校名な儒者、漢学者である。よって「漢学系私立中学校」を副題とした拙論「学制期における東京の私立中学校I」を書いた。高名な儒者には後に東京大学教授になる島田重礼、漢詩人・大沼枕山、漢学者・安井息軒、文章家・林鶴梁が名を連ねている。そこで500に及ぶ私立中学校の校主（校長）の履歴を悉皆調査した。東京都政史料館には「私学開学願書綴」の外に府内中学区別の「明治六年一月・開学明細書綴」があり、そこに塾主（校主）の略歴と開業時期、塾の位置、学科、生徒人員等が簡潔に記されている。これを用いて悉皆調査ができた。さらに調査を深めたい重要人物については竹林貫一『漢学者伝記集成』、小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』等によって、その人物像と漢学塾開業の理由を簡潔に書いた。

明治6年の「学制二編」によって開成学校とその進学学校として外国語学校が制度化された。開成学校は将来の大学をめざすものでさし当り西洋の科学技術摂取を目的とするので教師はすべて西洋人であった。ためにその学生は外国語に堪能でなければならない。そこで急遽つくられたのが各大学区本部の官立外国語学校である。しかしその生徒が卒業して開成学校の学生になるのには数年かかる。東京府下には慶応義塾をはじめ数多くの洋学塾がある。これらを私立外国語学校と認可して応急に間に合わせよう。こうして「公私学校表」に「外国語学校表」追加された。「外国語学校表」は明治7年の『文部省第2年表』から9年の『第4年報』までに収載されている。ここに収載された東京府の私立外国語学校は115校である。これら学校の主宰者、開学の目的、動機、その経緯等

を明らかにしなければならない。都政史料館所蔵の「開学願書」「開学明細書」は勿論であるが、洋学塾については『新聞雑誌』をはじめ、開明的新聞が多くの情報を発しているから府下の新聞記事により、また『慶応義塾百年史』以下、次の学校沿革史を参考にした。『攻玉社九十年史』『同百年史』『東京開成中学校資料』『女子学院五十年史』『青山学院九十年史』等。さらに当時の洋学塾にかかわった人物の自伝、伝記、即ち『福翁自伝』、『犬養木堂伝』、「半峰昔ばなし」(高田早苗)、滝田貞治著『仏学始祖・村上英俊』、前田蓮山『原敬伝』等を利用して洋学塾の次第を充実させた。

さて私立外国語学校の史料を読み解く過程で私立中学校(漢学塾)との違いに驚いた。規模が違うし、組織が違う。そこで①私塾型、②共同型、③結社型、④教師雇い型に分類した。

私塾型外国語学校と言うのは漢学塾と同じで一人の学者が弟子をとる私学である。信州松代藩の藩医で江戸深川の松代藩下屋敷でフランス語と化学を教えていた村上英俊の達理堂はその典型である。明治10年以後は衰えたが明治初年のフランス語の私塾として高名であった。私塾型外国語学校は56校あって全体の半数を占める。

共同型というのは友人または弟子と共同で語学または数学等を教える学校を言う。近藤真琴の攻玉社がその代表で、近藤門下の弟子たちが英学や算術・数学を手分けして教えた。共同型は12校であるが私塾型より規模が大きく次に述べる結社型に発展する学校である。

結社型は慶応義塾のように同志が結社して経営の責任を持つ近代私学を言う。慶応義塾の外、中村正直の同人社など12校ほどあり、明治前期に賑わったが、外国語が中等教育に浸透しんとうすると衰退した。

教師雇い型というのは有力者が学校を開いて外国人や日本人の外国語教師を雇う私学をいう。22校あるが明治8年頃、旧江戸藩邸に設置された讃岐高松藩の元藩主・松平頼聡よりふさ たまもの玉藻学校、上総大多喜藩主・大河内正質まさただの学校(校名なし)、丹後宮津藩主・本庄宗武の本庄学校が注目される。いずれも佐幕派

の大名で文明開化の一翼を担おうと空屋になった藩邸に外国語学校を開いたが長続きしなかった。明治10年の西南戦争勃発で財政の窮乏により外国学校は一たん廃止。私立外国語学校は中学校その他に変更された。以上が「私立外国語学校の開業と継続状況」を副題とした拙論「学制期における東京の私立中学校(2)」である。

続く拙論「学制期・東京の私立中学校(3) — その実態 —」は私立中学校・外国語学校を合わせて、その学科、形態、教員、生徒数、学費等を調査し、その教育史的意義を述べたものである。時期的には学制が実施された明治6年から教育公布の12年までを扱った。

これで500に及ぶ学制期の私立中学校、私立外国語学校を悉皆調査したが、この時期、東京府が経営維持した中学校もあった。諸制度をつくりはじめたこの時期、変転極まりない東京府の公立中学校を一瞥^{いちべつ}しておこう。

明治3年2月の「大学規則」「中小学規則」が発表されると東京府は新政府と協議の上、府の中学校と小学校をつくろうと思い芝増上寺内源流院をはじめ府内6寺院に6校の小学校をたてた。次いで中学校を永田町の岸和田藩邸を買い上げてここに開いた。しかるに火災で全焼したので近くに校舎を新築し、ここに移った。開校すると東京在住の武士の子弟が90人ほど集り、漢文の授業が始ったが、政府が洋学を求めていたので東京府は別に洋語学校を近くにたて、東京府中学校は約一年で閉鎖された。この間の東京府中学校は東京府主管とは言うもののその財源はすべて政府からでていたので明治4年、文部省ができるこれらの学校はすべて文部省管轄になり、学制実施とともにすべて消え去った。

明治10年の西南戦争を機に財政難のため学制を変更しはじめた。東京開成学校と東京医学校を合併して最高学府東京大学を設立し、開成学校予科と官立英語学校を合併して大学予備門をつくり各地の外国語学校は中学校に変更された。東京大学に進学するには各地の中学校から予備門に入学せねばならず、中学校に進学受験問題が重圧としてのしかかってきた。これを深刻に受け止めたのは東京大学と文部省であった。果たして地方の中学校にそれができるとあ

ろうか。東京府下に多くの私立中学校があるが、よい中学校といえども東京大学進学に適しているかわからない。それならばいっそ東京府下に進学用の府立中学校をたててしまえと東京府に誘いをかけた。その詳細は省略するが、東京府にはまた別の悩みがあった。それは小学校卒業生の急増であった。

東京府は学制実施以来、府内の私塾寺子屋を動員したり神社寺院の一隅を借りたりして小学校の普及につとめたが、「学制」の平等公平を信奉するあまり8年制小学校を一律におし進めた。しかし実態は士族と平民の間に、さらに区内に住む町人と郡部に住む農民の子どもたちの間に文化や教養の違いがあり、同一の授業を押し進めるのに無理があった。それに東京は京都と並んで女子の就学者が多く、これらも均一カリキュラムでははみ出してしまう。そこで明治11年4月、教則の大改革をおこない男子尋常科6年、女子尋常科6年、簡易科4年に短縮した。よって大量の小学校卒業生が予想され、卒業生を受け入れる中学校が必要となったのである。本稿は都政史料館所蔵の「東京府管下中小学創立大意」「明治十一年・回議録第一中学書類」、東京都立日比谷高校所蔵の『東京府立第一中学校沿革誌』『如蘭会報(同窓会誌)』を基本資料としたが、倉沢剛『小学校の歴史』1～3に負う所も多かった。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

何気に眺めていた、東京新聞の小さな囲み欄である「この人」に掲載されていた、吉田智さん(44歳、気象庁気象研究所勤務)の紹介「雷の写真集を手がけた主任研究官」(2022年8月3日、3面)が、私の目に留まりました。吉田さんは、つくばにある気象研究所の主任研究官として、日々気象現象の解明に取り組んでいるよし。話によれば、雷の研究を始めたのも、大阪大学の大学院生時代からだ。本務の忙しい合間をぬって、写真集『稲妻と雷の図鑑』(グラフィック社)を刊行したのだといいます。なかなか凄いことですね。身近な現象ながら、「なぜ雲内に電気がたまるのか?」については諸説あっても、いまだ十分に解明されていないのだそうです。どうしてだろう?なぜだろう?といった好奇心が、やはり肝心な原点なのかもしれませんね。(谷本)

山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義 大正篇』(ちくま新書、2022年)に収録された和崎光太郎による「新教育」の章を読んでいたら、新教育の「終焉」に関する次のような一節が目にとまった。

この「終焉」は、新教育運動・思想の「終焉」であり、新教育は国が定める「教育」に部分的に吸収されていった。一九三三年から改訂が始まった国定教科書に新教育の成果が多分に盛り込まれているのは、新教育のうち国が定める「教育」に有用とみなされる部分が積極的に国策としての「教育」に取り込まれていったことを象徴する。一九三八年の教育審議会において国民学校構想の中に合科教育(総合教育)を取り入れるにあたり、「長所だけをとり自由主義の個人主義思想は取入れぬようにするという警戒が非常に必要であろうと思います」、「純教育的自由主義は行われるけれども、国民教育以外の自由主義は行わせないようにしないとイケないと思います」といった発言がみられることも、新教育の思想が部分的に排除され部分的に取入れられていったことを如実に表している。

この部分を読んで、では国策「教育」に取り込まれなかった新教育運動の「自由主義」とは何だったのか、改めて問い直したい気がしてきた。現代の「生きる力」や「主権者教育」などと重なる部分を感じられたからだ。本書は各章の末尾に「さらに詳しく知るための参考文献」が示されているが、新教育の「自由主義」とはどのような質をもったものだったのか、参考文献を読んで確かめたい。なるほど、うまい構成になっていると感じた。(富岡)

会員消息

本年7月、ネットニュースによれば、都内八王子にある帝京大学総合博物館で、大学の鉄道研究部による企画展「帝京でつげんと多摩地域の鉄道 42年の歩み」が催されたという。なお同部は、テレビ番組「タモリ倶楽部」などでも大学対抗戦で優勝するほどの鉄道知識を有しているとのこと。帝京大学の博物館でも、学内の部活動主催の企画展は初めての試みだそう。とても素晴らしい企画だと感じますね。帝京大でつげん部員によれば、「多摩地域の鉄道の魅力を皆さんに伝えたいと思った。キャンパスの近隣に駅が3駅あり、高幡不動駅と多摩センター駅、聖蹟桜ヶ丘駅から直通バスが出ているなど鉄道が近くにある。大学の中にある博物館なので、学生にも普段使っている鉄道の歴史を身近に思ってもらいたいと思って展示を作り上げた。私たちならではの展示だと思う」と。このような動きは、他大学でもこれから増えていくのかもしれませんが。それは大いにたのしみです。(谷本)

平野婦美子の『女教師の記録』（『昭和前期「教師論」文献集成』第25巻、ゆまに書房）を読みました。教師の仕事って、なんて大切なんだ。「なんだい、先生だ、先生だなんて、あんなに小つちやくて、まだ子供ぢやねえか。大した別嬪さんでもねえなあ」。勤務校では、教員採用選考試験第1次試験が終わりました。多くのすぐれた教師の歴史に学ぶ必要がありますね。(山本剛)

この夏、補聴器の試用を始めました。ここ数年、健康診断で高音域での聴力の低下を指摘されていましたし、教室での学生の言葉などが少しだけ聞き取りにくくなっていることもあり、思い切って補聴器外来ある耳鼻科に行ったところ、高音域が40db程度の軽度難聴ということで、補聴器はつけてもつけなくてもよいぐらいと診断されましたが、とりあえずお試しで補聴器に耳を慣らしながら細かく調整してもらっています。結構高いので買うには少し勇気がいりますが、まずは体験として楽しんでいます。合唱やオーディオを楽しんでいて、静かに耳を傾けるのが好きで、聴力低下はあまり意識してこなかったのですが、考えてみれば、高音域の聴力が低下するとまわりの細かい音が入らないので静かに聞こえていたわけです。新しい経験をするのは、やはり楽しいですね。

また、旧制高等学校記念館のWebと展示室で公開されている「今昔青春群像」を次頁ご紹介し<<https://matsu-haku.com/koutougakkou/archives/1276>>。旧制松本高校の教室や地域の風景の昔の今を写真で比較できるようになっています。

(冨岡)

旧制高等学校記念館企画展

今昔青春群像

webで公開中 この画像をクリックするとページへ飛びます。

内容

松本高等学校生が青春を謳歌した松本の街並みを現在の松本の街の様子と比較してみました。当時の学生が松本のどこでどのように生活していたのか、また、街の発展した様子が分かる展示です。下記の文字をクリックすることで閲覧できます。

- [1. 教室](#)
- [2. 縣の森](#)
- [3. 図書閲覧室](#)
- [4. 松本駅前通り](#)
- [5. 松本駅ホーム](#)

(例)



本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。